

NPO 自立支援センター ふるさとの会

2006.10.25
【第10号】



これはHTML形式
のMAILです。
オンラインで無い場合
は画像が表示され
ない可能性があります。

HOME PAGE

SCHEDULE

EVENTs

※ふるさとの会のメールマガジンをご愛読いただき、誠にありがとうございます。
今後もふるさとの会の活動内容を定期的に情報発信させていただきたいと存じます。
ご不要の場合はお手数ですがご返信くださいますようお願いいたします。

INDEX

1. ふるさとの会宿泊所日記
2. シンポジウムのお誘い
3. 今月のボランティア募集

1. ふるさとの会宿泊所日記

NPOによる住居保障の課題－HIVシンポをきっかけに－

12月8日に都民ホールで開かれるシンポジウム「HIV/AIDS専門医療機関と地域とのより良い連携に向けて」に演者として参加することになりました。

ホームレス支援のNPOにお声がかかったのは、宿泊所や自立援助ホーム(ホテル三晃)でHIV感染者を受け入れてきた経験があるからです。私たちとしては、しかし単に事例を報告するだけでなく、これを機会にNPOによる住居保障の到達点と課題を整理していきたいと思っています。特に最近感じているのは「ケアの慣れ」、「事故のリスク管理」、「施設の老朽化」などの問題です。今回と次号のメルマガではこれらをキーワードにしなが、シンポの「予告編」をお送りすることにします。

HIV感染者の入所受け入れ

宿泊所でHIVの感染者を初めて受け入れたのは、2005年のあさひ館でした。じつをいうと、それ以前にも千束館で入所依頼を受けたことはあったのですが、断っていました。もちろん、共同生活で感染するリスク(科学的なリスク)が極めて低いことは分かっていたのですが、なにせ古い施設は人口密度が高く(千束館は二段ベッド)、そういう所で不治の感染症を一素人が一管理することには、万が一事故(感染)が生じたときの事を考えると、風評被害を含めて社会的なリスクがあることを認めざるを得ません。

あさひ館に入所の相談があったとき、医者某先生に相談したところ、三つの問題を示されました。①アルバイトを含め、職員の動揺を抑えるのに苦勞するであろうこと。②感染の可能性がまったくないとは言えないこと。③現在のところエイズは治らない病気であること。このときは立ち話でしたが、エイズという社会問題の社会性を鋭く突いた指摘だと、今もなお思います。

これらのリスクを認識しながら、それでも受け入れてみようと思ったのは、いくつかの宿泊所を持つようになって、居住環境を向上させてきたという自負がありました。千束館を設立したのは1999年、あさひ館は2002年。その間たった三年ですが、初めての宿泊所と4番目につくった宿泊所では、ハード面も、事業規模も、スタッフの数も全然違います。一人あたりの面積は m²から m²に広がり、事業規模は約2倍、スタッフも千束館の常勤1名に対しあさひでは2.5人です(当時)。

このような内的環境の変化に加え、日常的には某先生が毎週診察に来てくれ、何かあれば相談に乗ってくれますし、専門病院は入所後もバックアップすることを約束してくれました。受け入れに当たっては、入所前に職員向けの説明会を開き、専門病院のコーディネーター・ナースが出張講義をしてくれました。

こうして「社会的なリスク」をコントロールしながら、相談を受けてから3箇月後、あさひ館に入所することになりました。そして半年ほどたった2005年10月には、ご本人の希望もあり、個室でエレベーター付きのホテル三晃に引っ越しました。

こんなはずじゃなかった

当時三晃を担当していた筆者は、宿泊所の経験があったので彼を受け入れることには何の抵抗感もありませんでした。だが甘かった。予想外の出来事が頻発したのです。

風呂に入る前に持っていたはずのヒゲ剃りが、戻ってきたときにはなくなっていたり、脱水症状を起こし点滴してもらったときなどは、自分で針を抜いたのはよいが、勝手にどこかに捨ててしまい、しかもどこに捨てたのか思い出せないということがありました。その度に、職員総出でゴミ箱をひっくり返しました。

「こんなに手がかかるのか…」。入所調整を担当した身としては、職員ミーティングで彼のことが話題になるたびに自分が批判されているような気になり、話題にする職員Aを逆恨みしたこともありました。

「宿泊所の経験があったので」と書きましたが、この経験が油断につながったのです。彼は非常に希なケースだそうですが、HIV感染による脳症のせいで記憶障害がありました。その進行を考慮に入れず、さらにあさひ館と三晃の違い(環境の変化)もよく考えないまま、「いつもの仕事をしていれば大丈夫」と思いこんでいました。まさに「ケアの慣れ」によってできた陥穽(落とし穴)です。大慌てでヘルパーさんやクリニックのコーディネーターと話し合い、カミソリや医療ゴミの管理を徹底して行うようになりました。

リスク管理の端緒として

その後もHIV感染者の入所依頼を時々受けましたが、残念ながら、彼はある事情で三晃を出ることになってしまいました。しかし上記のようなドタバタを経験したことは、結果として思わぬ効用も生みだしました。NPOの施設においてもリスク管理全般を考えるきっかけになったのです。

例えばプライバシー保護の問題。個人情報部が部外者の触れられる場所に置かれていないか、情報管理にいつそう注意するようになりました。あるいは利用者が持っている医療ゴミの行方。例えば糖尿病患者が血糖値を測った針を普通のゴミ箱に入れていないか。考え出すと怖いのですが、いままでNPOの施設でゴミ箱に手を突っ込んで「チクツとした」職員や利用者がいないとは断言できないのです(もちろん絶対的な安全などどこにもなく、私たちは駅のゴミ箱でマガジンを拾うときにも同じリスクをおかしているのですが)。

糖尿病患者は千束館にだって数多くいるし、HIV感染者を何人も受けて入れた。このような経験は、さまざまな利用者を受け入れるノウハウを蓄積し、NPO施設の力量を高めます。しかし同時に、「慣れ」による緊張感の低下をもたらし、思わぬリスクを呼び込みます。専門家と連携して糖尿病患者の「ケア」ができることと、針刺し事故の対策とは、別物です。

先日、国立国際医療センターの看護支援調整官である島田恵さんから印象的な話を聞きました。大きな病院でもいまだにエイズ患者に対する偏見は強く、HIVに感染しているという理由で診察さえしてくれない医療機関がある。一般患者の評判を恐れているのかもしれないが、本当はエイズ患者を受け入れている病院の方がリスク管理がしっかりしていて、むしろどんな患者にとっても安心できる病院であるはずなのに、と。これは施設にも同じ事が言えなければなりません。ただし、いまはまだその途半ばです。

ようやく本題に近づいてきました。次号では別の事例にも触れつつ、冒頭に挙げたキーワードの核心に迫っていきたいと思います。

註) プライバシーに配慮し、事実と異なる記述があることをご了承ください。

(宿泊所・自立援助ホーム事業部 滝脇 憲)

● HIV医療包括ケア体制の整備に関する研究 (コーディネーターナースの立場から) 成果発表会

HIV/AIDS専門医療機関と地域とのより良い連携に向けて

【開催】12月8日

【会場】都庁都民ホール(東京・新宿区)

【料金】無料

【申込】HP参照 (<http://www.acc.go.jp>)

【問合せ】エイズ治療・研究開発センター

TEL: 03-3202-7181、FAX: 3208-4244

Eメール: webmaster@imcj.acc.go.jp

2. ふるさとのお誘い

包括的地域生活支援を考えるためのシンポジウム 『ホームレスの自立支援・就労支援とは』

10月29日(日)午後1時半～4時半(開場は1時)

場所: 財団法人東京しごと財団 講堂(地図参照 <http://www.shigotozaidan.jp/map.html>) 資料代: 1000円

いよいよ今週末に迫ってまいりました、第12回ふるさとのお誘いシンポジウム。最近危機感の高まっている、ニートやワーキングプアの問題など、一人ホームレス問題とばかりいえない社会船体の就労・労働問題をテーマに、様々な立場で各地でご活躍の方々にご参加いただきます。活発な意見交換と今後の展望への期待が高まっており、多くの方々のお申し込みをいただいております。事前のお申し込みをいただければ幸いです。当日のご参加も可能です。直接会場においで下さい、ご来場をお待ちしております。

労働に関する問題がクローズアップされています。「働きたいけど働けない人」、「失業者」にもカウントされない人、ニート、引きこもり、パート労働者、母子父子家庭、生活保護基準以下の収入で生活する「ワーキングプア」。

ホームレス問題も「就労」の問題であると言えます。しかしながら、それは単に仕事があれば解決できる問題ではありません。「ホームレス」状態にあるということは社会との関係を絶つことであり、その生活が長期化すればするほど新しく仕事に就いたり地域生活を再開したりすることがより困難となります。いざ仕事に就いても継続していくことは容易ではありません。生活習慣、人間関係、健康、債務問題、そして偏見。

こうした状況から脱却するためにはどのような社会的支援が必要なのでしょうか。ホームレスの就労支援活動をする中で我々はその答えにたどり着きました。それは、困難な状況から再び地域社会で働いて安心できる地域生活を送るためには、様々な「ケア」が必要であるということです。

ここ数年間、東京では行政、民間企業、NPO、研究者など様々なセクターが連携しながらホームレスの自立支援事業を推進してきました。ホームレス自立支援法が施行されてから5年間が経過した現在、我々はこれまでの活動を見直すとともに、より広い視野から我々の活動の意義を捉えなおす段階にきていると考えて

います。

基調講演 福原 宏幸 氏 大阪市立大学大学院 経済学研究科 教授
 シンポジウム ホームレスの自立支援・就労支援とは
 パネリスト 富田 一幸 氏(株式会社ナイス 代表取締役)
 布川 日佐史 氏(静岡大学人文学部教授)
 福原 宏幸 氏(大阪市立大学大学院 経済学研究科 教授)
 水田 恵(特定非営利活動法人自立支援センターふるさとの会 代表)
 コーディネータ 山岡 義典 氏(法政大学現代福祉学部教授、日本NPOセンター副代表理事)

3. 今月のボランティア募集

ふるさとの会地域生活支援事業部では、毎月一回、地域支援センターやリビング、宿泊所の利用者の方々のお出かけプログラムを実施しています。

大勢でのお出かけを参加者全員の方に楽しんでいただくには、利用者さん同士の支えあいもさることながら、たくさんの方々の協力が必要です。来月は24日に高尾山紅葉狩りを予定しております。是非、お出かけ付き添い&見守りボランティアとして、一緒に行事を支えていただけませんか？

また、ふるさとの会で運営受託している城北福祉センター敬老室でも、ボランティアサークルふるさとの会を中心に、毎月第3日曜日、利用者の方たちとの食事会を開催しています。料理自慢の方、お待ちしております！

興味がある、月一回くらいなら時間を作れるという方は、どうぞお気軽に下記までお問い合わせ下さい。

毎週土曜に開催されてきました『山谷塾』も、あと2回を残すところになりました。シンポジウムとあわせて、こちらも是非ご参加下さい！



お問い合わせはこちらまで↓

地域支援センター「すみだ」 03-5819-3254 担当:フルキ
 ボランティアサークルふるさとの会&敬老室 03-3801-0377 担当:アキヤマ

発行元: 特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会
 〒111-0031 東京都台東区千束4-39-6
 TEL: 03-3876-8150 FAX: 03-3876-7950